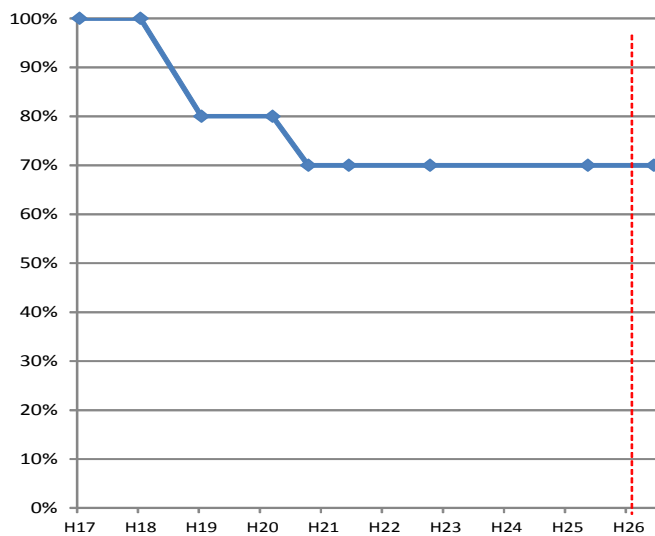


樹種名	イイギリ (別名：ナンテンギリ)	
科 目	イイギリ科	
学 名	<i>Idesia polycarpa</i>	
分 布	日本 (本州以南)、国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。	
樹木特性	陽樹であり二次林に生息し、土壌肥沃な斜面に多く、初期成長は早く先駆種である。このため、周りの樹木が成長し暗い環境となると発芽・生息がすることが困難となり、森林の発達と共に数が減少する。 生育環境が良好な場合では、寿命は最大樹齢が 100 年以上と推定され、埋土種子は休眠し、その寿命も長いと推定される。	
用 途	街路樹、公園樹、器具・下駄材として利用。	
植栽本数 (植栽密度)	10 本 (他樹種との混植)	
特 徴	<p>【樹形】 落葉高木で雌雄異株を有し、高さは 15~20m。葉は互生、キリやアカメガシワに似て幅広い。葉柄は長く、先の方に 1 対の蜜腺がある (アカメガシワにも似ているが、蜜腺は葉身に付けている)。雄花も雌花も同じように黄緑色で 3~5 月頃咲き、円錐花序となり垂れ下がる。花弁はなく、萼片の数は 5 枚前後で一定しない。雄花には多数の雄蕊がある。雌花にも退化した雄蕊があり、子房上位。果実はブドウの房のように垂れ下がる。液果で直径 1cm ほど。熟すと真っ赤になり、多数の細かい種子を含む。果実は落葉後も長く残り、遠目にも良く目立つ。白実の品種もある。</p>	
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽直後から 3 年間はコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。成長量は大きく、植栽から 9 年で平均樹高は 9m 程度にまで生育している。	 
被 害	コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が見られた。	

### イイギリ 現存率



#### 【現存率】

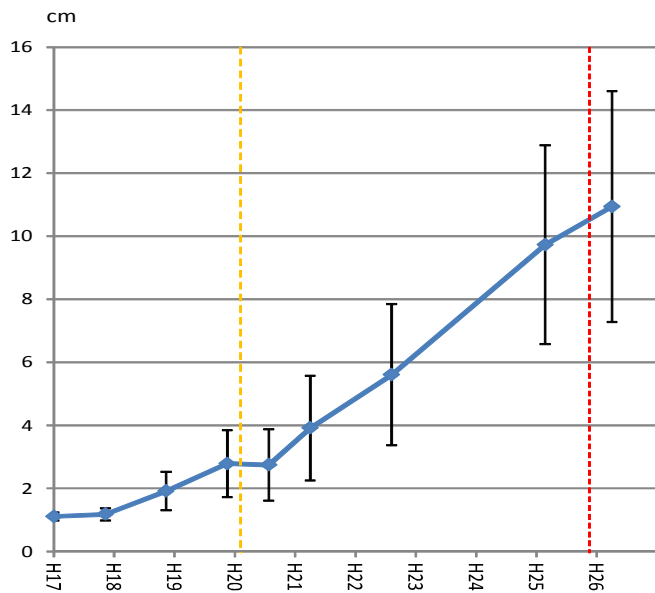
植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害により枯死が発生した。

平成 21 年度以降の枯死は見られない。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 70.0%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

### イイギリ 根元・胸高直径



#### 【根元・胸高直径】

植栽後、4 年が経過した頃より、成長量が大幅に増加している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 10.94 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

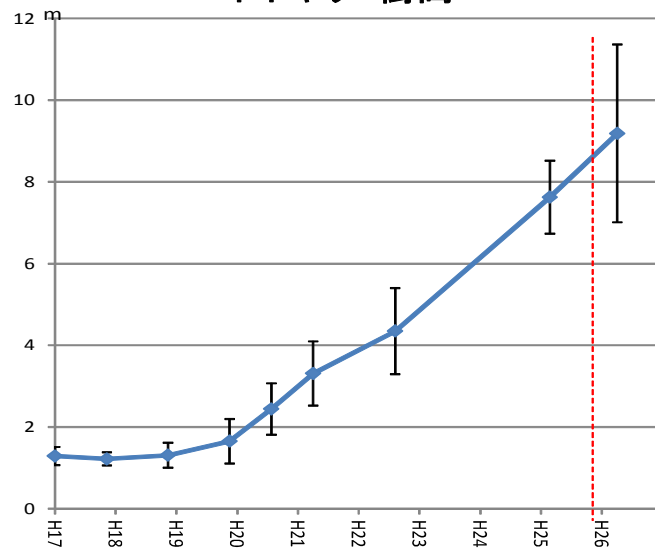
#### 【樹 高】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 9.18mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

### イイギリ 樹高



#### 《プチ情報》

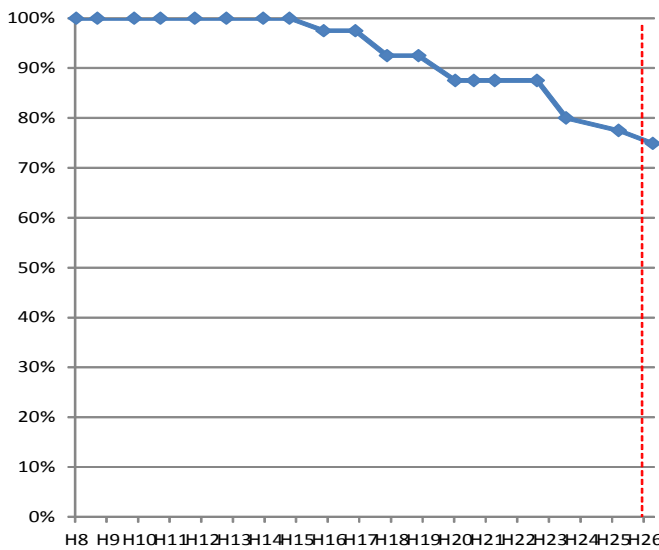
和名の由来は、昔、葉で飯を包んだため飯桐といわれる。果実がナンテンに似るためナンテンギリ（南天桐）ともいう。イイギリ属の唯一の種。

秋から冬に熟す多数の赤い果実が美しいので、栽培もされ、生け花や装飾にも使われる。



樹種名	イスノキ（別名：ヒョンノキ）	
科目	マンサク科	
学名	<i>Distylium racemosum</i>	
分布	日本では関東以西、四国、九州、琉球列島に産する。関東、四国、九州では低地の森林によく見かける。国外では済州島、台湾、中国に分布する。	
樹木特性	暖地の森林に生える代表的な樹木のひとつであり、カシ類と混生して照葉樹林を構成することも多い。幹は少し赤色がかかり、独特の樹肌の模様となる。葉はあまり特徴のない形で、厚みがあり、光沢が強く、虫えいができるので有名である。	
用途	材は堅く強靱で以前は算盤の玉に、現在は床材・床柱に利用。心材は黒いので紫檀や黒檀の代替材として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	207本 / 0.10ha (2,000本 / ha)	
特徴	<p>【樹形】 常緑高木であり、樹高は約20m程度となり、樹皮は灰白色。大木になると赤っぽくなる。 葉は厚く長楕円形で互生、深緑で表面に強いつやがあり、4月頃、葉腋に小花を総状花序につける。花序の基部には雄花、先の方には両生花がつく。花弁はなく、萼も小さいが雄しべの葯が赤っぽく色づくのが美しい。ただし見られる時期は短い。葯は乾燥すると裂開し、花粉は風によって飛散する。 果実は表面が黄褐色の毛で覆われ、先端に雌薬が二裂した突起として突き出すのが目につく。また、この虫こぶがタンニンを含むので染料の材料として使われる。</p>	
試験地での様子	<p>ポット苗を植栽し、植栽初期に隣接ブロックに植栽したネムノキがシカやウサギの食害を受け全滅状態となったが、イスノキへの被害は見られなかった。 植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 現存率は75%であり、植栽から18年を経過した現在の平均樹高は6m程度まで成長している。</p>	 
被害	<p>葉に袋状の虫こぶ（イスノキアキアブラムシ）が目立つようになった。小枝にモンゼンイヌアブラムシの虫こぶも散見できる。 植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 (延べ駆除本数 コウモリガ：1本、カミキリムシ類：21本)</p>	

### イスノキ 現存率



#### 【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害により枯死が発生している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 74.9%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

#### 【根元・胸高直径】

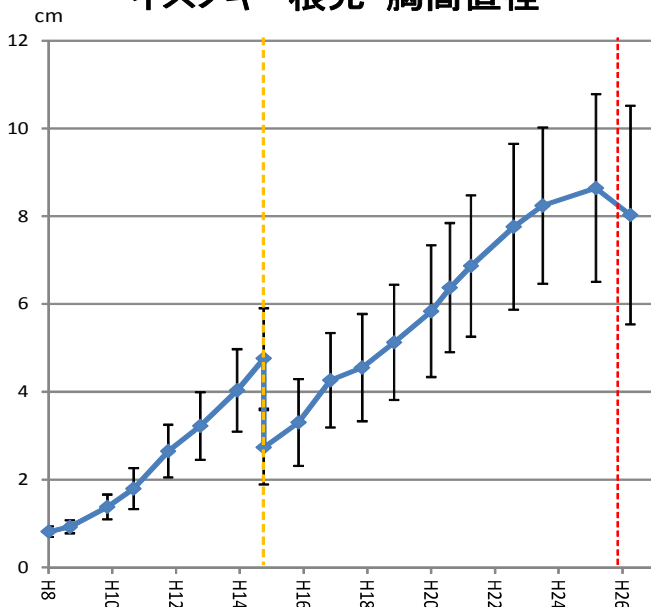
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 8.03 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

### イスノキ 根元・胸高直径



#### 【樹 高】

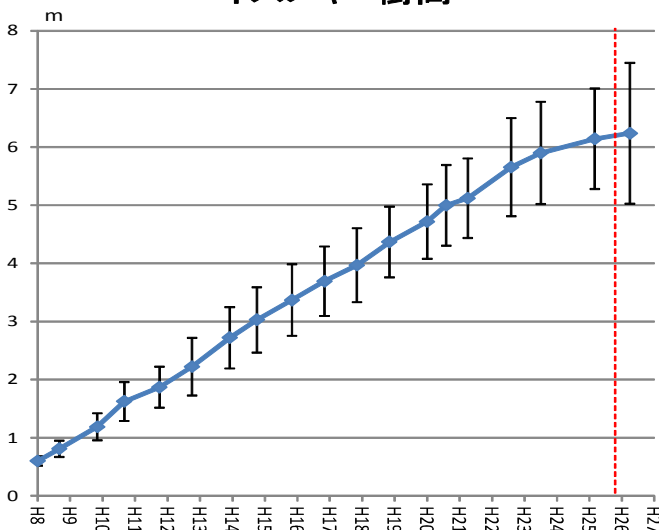
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 6.24mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



### イスノキ 樹高



#### 《プチ情報》

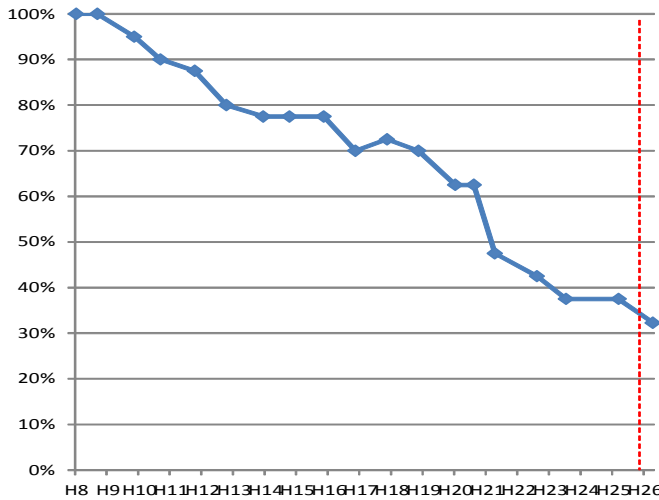
材は乾燥させると非常に堅く丈夫になるので、家具・木刀（示現流系統の剣術で使用されているのは有名）・杖などの材料に、灰（柞灰(いすばい)）は陶磁器の釉の融剤とする。乾燥に強く丈夫なので街路樹として栽培されることもある。

葉にしばしば虫こぶがつく。イスノキコムネアブラムシの寄生では葉の面に多数の小型の突起状の虫こぶを、イスオムネアブラムシの寄生によっては丸く大きく膨らんだ虫こぶ（ひよんの実）が形成される。

どちらも非常に頻繁に出現するので、これを目当てにイスノキが特定できるほどである。とくにひよんの実は大きくなり、成熟すると表面が硬く、内部が空洞になるので、出入り口の穴に唇を当てて吹くと笛として使える。これが別名ヒョンノキ（ひょうと鳴る木）の由来とも言われる。

樹種名	イタヤカエデ	
科 目	カエデ科	
学 名	<i>Acer pictum</i>	
分 布	東アジアに広く分布し、日本には 8 亜種が認められ、イタヤカエデはその総称的な名である。	
樹木特性	半陰樹であり、太い枝を出し、大きく広がった樹冠となる。雄雌同株で 4~5 月に葉が開くと同時に黄緑の花をつける。 9 月頃に果実熟し、冬にかけて、二又の翅で風によって回りながら落下する。葉は手のひら形をしていて秋には落葉する。	
用 途	材は、建築、器具、ハーモニカなどの楽器、車両、床柱などの装飾材、ポーリングのピンなどに利用。	  
植栽本数/面積 (植栽密度)	201 本 / 0.05ha (4,000 本 / ha)	
特 徴	【樹形】 落葉高木であり、山地に生え、15~20m になる。春に葉を開く前に、緑黄色の小さな花を、枝先にたくさんつけるので、黄色い霞がかかったように見える。 樹皮は暗灰色で、縦縞の模様がわずかにある。老木になると浅く裂ける。 カエデ類は陰樹で、総じてあまり大きくならないが、イタヤカエデは直径 1m になるものもある。材は仕上げ面が美しい。	
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。現存率も 32 % と低く、生育状況も個体によって優劣が見られる。試験地周辺に自生木は見られないことから生育環境が適していないものと考えられた。 植栽から 18 年を経過した現在の平均樹高は 5m 程度となっている。	
被 害	シカの好きな樹木であり、幹の剥皮、葉の食害が予想されたが、当試験地では発生していない。 植栽後にコウモリガとカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 (延べ駆除本数 コウモリガ：38 本、カミキリムシ類：58 本)	

### イタヤカエデ 現存率



#### 【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害により枯死が発生している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 32.3%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

#### 【根元・胸高直径】

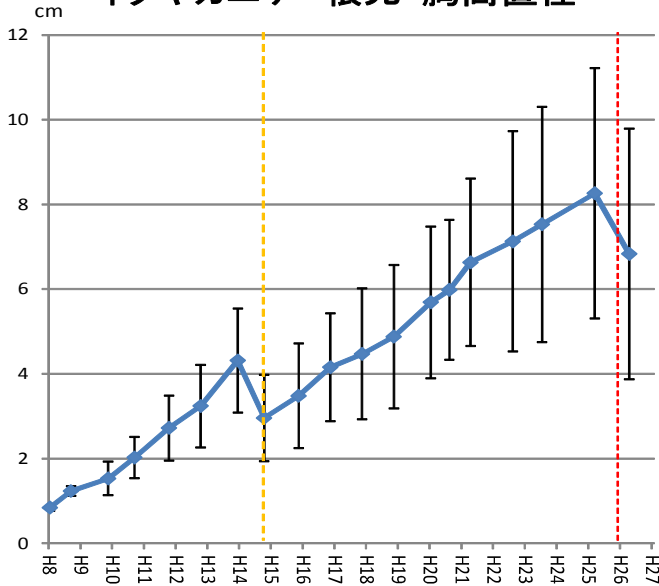
現存している樹木は順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 6.83 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

### イタヤカエデ 根元・胸高直径



#### 【樹 高】

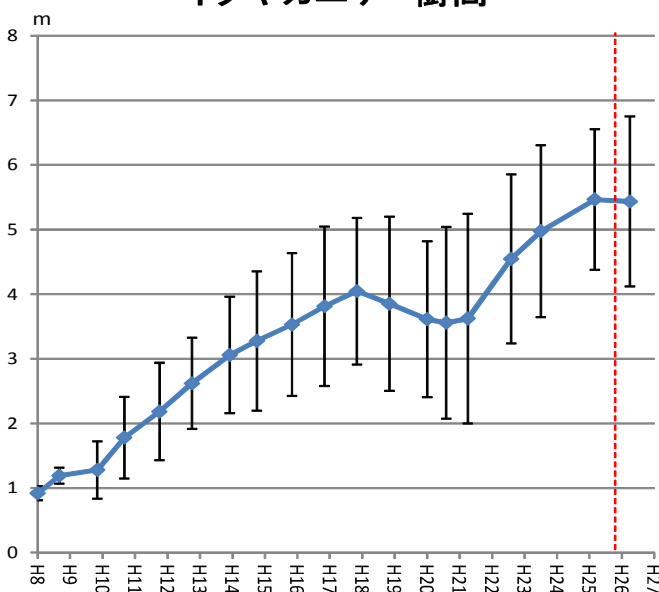
数値が低下している年度は、数値の大きい個体が枯死したことによるものである。

現存している樹木は順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 5.44mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

### イタヤカエデ 樹高



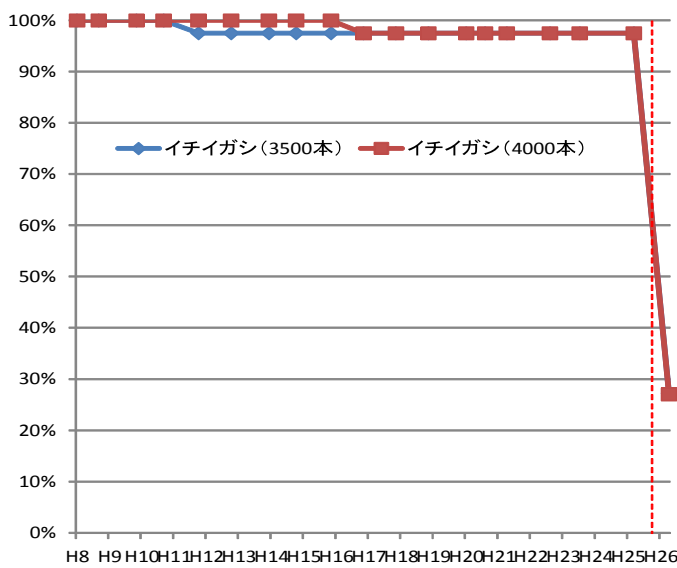
#### 《プチ情報》

エゾイタヤは本州日本海側、北海道からシベリアにかけて分布し、若枝と葉柄基部に微細毛がある。アカイタヤは北海道、本州の日本海側に分布し、全体が無毛、果実は大形である。

オニイタヤは北海道南部から九州にかけて分布し、葉裏に短立毛がある。エンコウカエデ(狭義のイタヤカエデ)は本州から九州にかけて分布し、若木の葉は深裂する。イタヤカエデの近縁種が朝鮮、中国から小アジアにかけて 12 種、ヨーロッパに 3 種ある。雨宿りができるくらいに、葉がよく繁り、板でふいた屋根のようなことからついたとも言われている。

樹種名	イチイガシ	
科目	ブナ科	
学名	<i>Quercus gilva</i>	
分布	本州（関東以西の太平洋側）、四国、九州、国外では済州島、台湾、中国に分布する。	
樹木特性	半陰樹であり、日照を好むが陰地・乾地でも育つ。低地の肥えた土地に生育する。さらに耐陰性が強く薄暗い林内でも稚樹が発生する。当展示林でも本数調整伐したのから薄暗い中で萌芽が発生する。	
用途	材は柾目の虎斑がみごとで器具・建築材に利用。昔は材の強靱を活かして舟の櫓に用いた。 公園樹としても利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	772 本 / 0.20ha (3500 本・4,000 本 / ha)	
特徴	<p>【樹形】 常緑高木であり大きいものは高さ 30m に達する。樹皮は黒っぽい灰色、非揃いに剥がれ落ちる。葉は倒非針形から広倒非針形、先端が急に尖り、縁は半ばから先端にかけて鋭い鋸歯が並ぶ。葉はやや硬く、若いうちはその表面に細かい毛を密生、後に無毛となり深緑になる。また、裏面は一面に黄褐色の星状毛を密布する。雌雄同株で 4 月から 5 月頃に開花する。材は弾力性があり加工しやすく形質も良好で柾目の虎斑がみごとである。</p>	
試験地での様子	ポット苗を植栽し、病虫獣害は少ないものの、現存率は 27% の結果であった。植栽から 18 年を経過した平均樹高は 13m 程度と成長状況は非常に良好であり、幹の曲がりも少なく通直性に優れている。林況が過密状態になり劣勢木を本数調整伐を行ったが、1 年後にはうっぺい状態に戻っている状況である。周囲の国有林にも多くの自生木が見られることから適地と考えられる。	
被害	特になし。	

### イチイガシ 現存率



#### 【現存率】

選定した調査木の現存率は比較的高く安定している。

林内の照度調整を図るため平成15年、16年、17年、20年、21年、24年度にわたり6回の本数調整伐を実施した。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は27.2%であった。

さらに、当試験地には自生したイチイガシが3本現存している。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

#### 【根元・胸高直径】

4,000本/haと3,500本/haともに同程度の成長である。

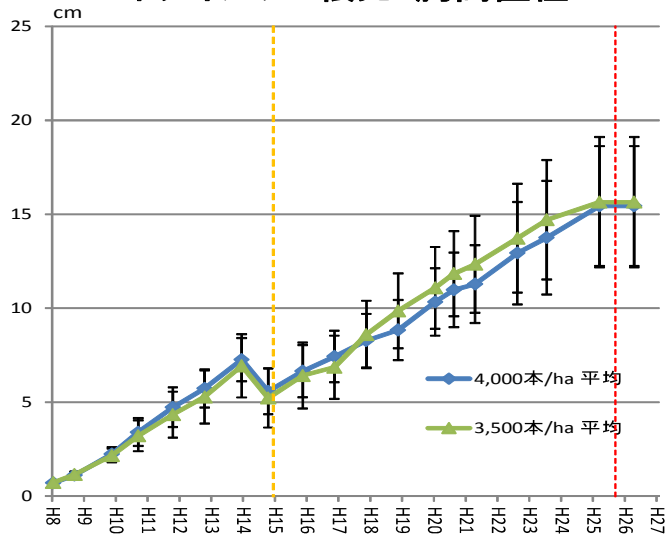
平成26年度に毎木調査を実施した結果、3,500本/haの平均胸高直径は15.65cmであり、4,000本/haの平均胸高直径は15.44cmであった。

さらに、自生しているイチイガシ(3本)の平均胸高直径は11.64cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

### イチイガシ 根元・胸高直径



#### 【樹高】

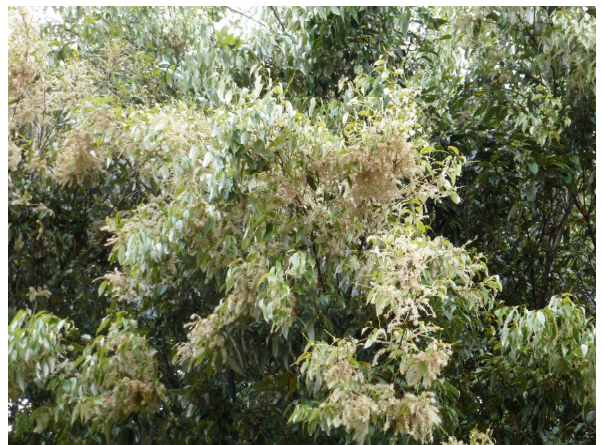
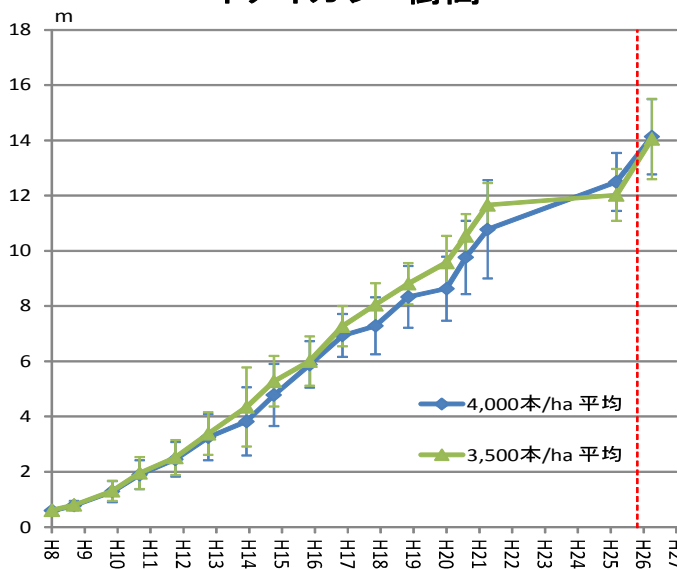
4,000本/haと3,500本/haともに同程度の成長である。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、3,500本/haの平均樹高は14.05mであり、4,000本/haの平均樹高は14.13mであった。

さらに、自生しているイチイガシ(3本)の平均樹高は8.93mと植栽木と比較して、低い状況であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。




### イチイガシ 樹高



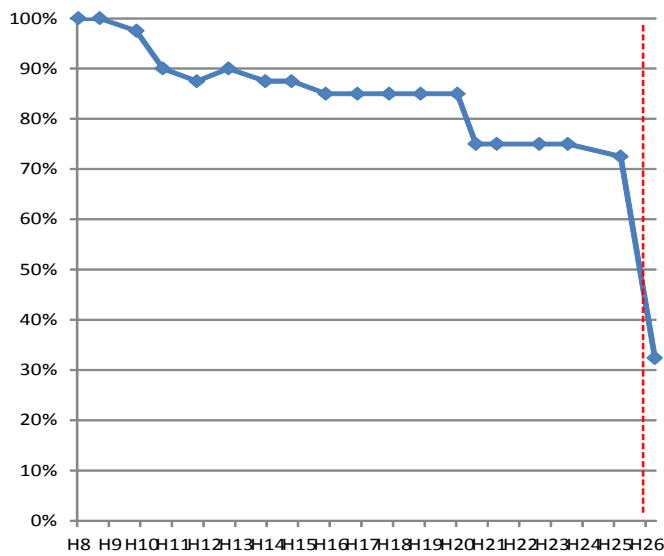
#### 《プチ情報》

カシ類では例外的に、タンニン(渋み)が少なく果実をあく抜きせずに食べることができる。



樹種名	イチョウ	
科目	イチョウ科	
学名	<i>Ginkgo biloba</i>	
分布	中国原産の落葉高木樹であり、人為的な移植等により、現在は世界中に分布し、年平均気温が 0~20℃の降水量 500~2000mmの地域に多く分布している。	
樹木特性	陽樹であり、ジュラ紀からはほぼそのままの姿で生き残った「生きた化石」と考えられ、世界各地の中生代ジュラ紀の地層からは、現在のイチョウ同様のものや絶滅したイチョウの仲間の化石が発見されている。これらのことから、恐竜の絶滅後に衰退し、中国の一部にのみ残ったものと考えられている。	
用途	材は黄白色で軟らかく、質が均等で緻密。光沢があるので碁盤・将棋盤・器具・彫刻・まな板・家具材に利用。内種皮（ぎんなん）は食用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	182本 / 0.05ha (約 3,600本 / ha)	
特徴	<p>【樹形】 針葉樹とされる場合もあるが、厳密には広葉樹にも針葉樹にも属さない。 樹高は 20~30m 程度まで成長し、葉は扇形で葉脈が付け根から先端まで伸びている。また、葉の中央部が浅く割れている。</p> <p>雌雄異株であるため、雄株と雌株があり、実は雌株にのみなる。雌雄の区別は葉の形でできるという俗説があるが、植物学的には根拠がなく、雌雄の判別は生殖器官の観察によるしかない。</p>	  
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後 2 年を経過した頃から枯死が発生したが、その後は順調に生育している。初期成長量は比較的小さかったが、植栽後 5 年目（下刈完了・樹高 2m 程度）から成長量が大幅に増加した。 病虫獣害も特に見られず、植栽から 18 年を経過した現在の平均樹高は 10m 程度まで順調に生育している。	
被害	特になし。	

## イチョウ 現存率



## 【現存率】

植栽から2年を経過した頃より、枯死が発生しているが、枯死の原因は特定できていない。

林内の照度調整を図るため、平成20年、22年、25年度に本数調整伐を実施した。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は32.4%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

## 【根元・胸高直径】

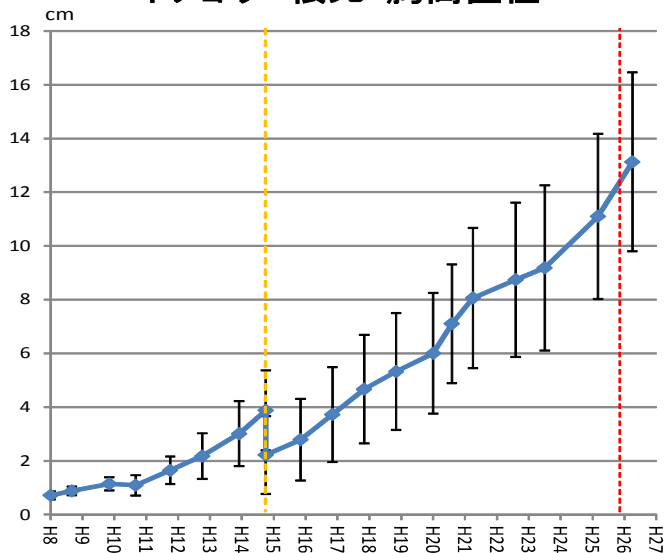
順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は13.13cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

## イチョウ 根元・胸高直径



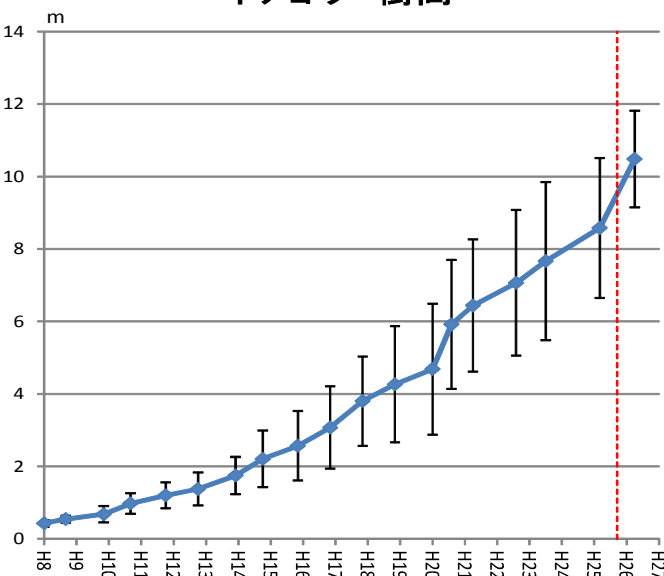
## 【樹高】

順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は、10.49mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

## イチョウ 樹高



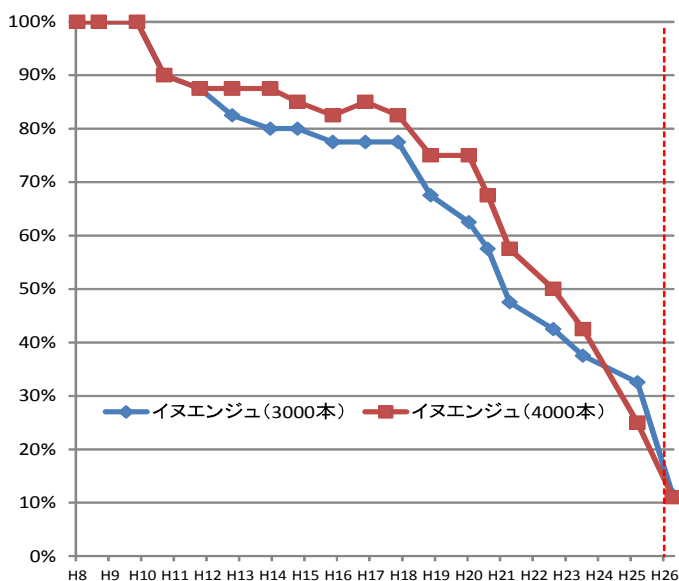
## 《プチ情報》

中国原産のイチョウは、漢名を「公孫樹」とい、裸子植物門イチョウ綱の中で唯一の現存している種であり、そのため生きた化石と呼ばれる。

アヒルの足のような形の葉は、秋には黄色く黄葉し、落葉する。ごく稀だが、葉がラッパ状になったものや、葉に突がつくものがあり、それぞれ「ラッパイチョウ」、「お葉付きイチョウ」と呼ばれる。また、大木では気根と呼ばれる枝から垂れ下がった円錐形の突起を生じる場合がある。この円錐状の突起は、「乳」と呼ばれ、「乳イチョウ」と呼ぶこともある。

樹種名	イヌエンジュ	
科 目	マメ科	
学 名	<i>Maackia amurensis</i>	
分 布	北海道、本州（関東・中部地方以北）の山地や丘陵の日当たりの良い落葉広葉樹林に散生している。	
樹木特性	陽樹であり、山地や林縁や川岸など、肥沃な日当たりの良い適潤地を好む。	
用 途	材は堅く緻密である。心材は暗褐色、辺材は淡黄白色で心材と辺材の対比が美しく床柱は珍重される。家具・菓子器・彫刻・おもちゃ材に利用。	  
植栽本数/面積 (植栽密度)	839 本 / 0.18ha (3,500 本・4,000 本 / ha)	
特 徴	<p>【樹 形】 マメ科の落葉高木で、高さ 10~15m となり、葉は奇数羽状複葉、小葉は 7~11 枚、卵形で長さ 4~8cm。7 月から 8 月にその年に伸びた枝の先に複総状花序を出し、蝶形花（ちょうけいか）を多数つける。 花は白く長さ 10~12mm、蝶形花冠の旗弁（きべん）は強く反り返り、10 本の雄しべは基部まで離生する。 豆果は広線形で扁平（へんぺい）、長さ 4~8cm、上側の縫合線に沿って狭い翼がある。種子は 3~6 個。 庭木とされ、材は環孔材で重く堅く緻密で美しくねばり強いので床柱、あるいはシタンの代用として家具、細工物に使われる。心材は暗褐色、辺材は淡黄白色で心材と辺材の対比が美しく床柱として珍重される。</p>	
試験地での様子	<p>ポット苗を植栽し、植栽後コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。また、環境の要因が原因と考えられる枯死も見られた。 植栽から 18 年を経過した平均樹高は 4m 程度となっており成長は早いとはいえ、現存率も 11 %と低い結果となった。</p>	
被 害	<p>コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 (延べ駆除本数 コウモリガ 44 本、カミキリムシ類：3 本)</p>	

### イヌエンジュ 現存率



#### 【現存率】

植栽後からコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害により枯死が発生している。

◆ 3,000 本/ha：調査数 40 本、生存数 12 本、生存率 30 %

◆ 4,000 本/ha：調査数 40 本、生存数 9 本、生存率 23 %

◆ 計：調査数 80 本、生存数 21 本、生存率 26 %

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 11.4%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更のため、データの連続性はない。

#### 【根元・胸高直径】

現存木は徐々に成長しているが、成長は遅い。

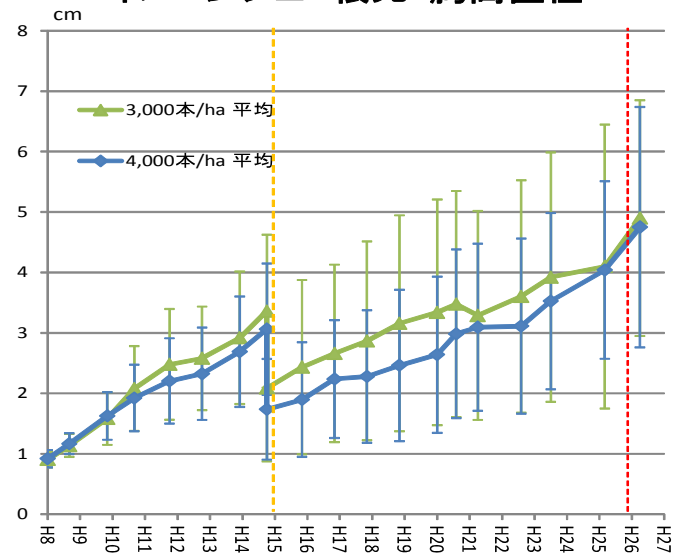
3,000 本/ha、4,000 本/ha とともに大きな差は見られない。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本/ha の平均胸高直径は、4.90 cmであり、4,000 本/ha の平均胸高直径は、4.75 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

### イヌエンジュ 根元・胸高直径



#### 【樹高】

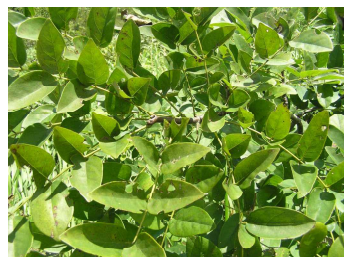
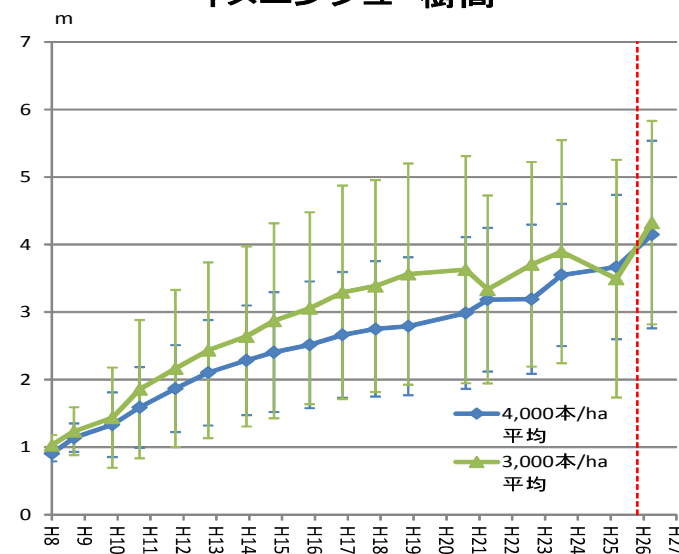
現存木は徐々に成長しているが、成長は遅い。

3,000 本/ha、4,000 本/ha とともに大きな差は見られない。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本/ha の平均樹高は、4.32m であり、4,000 本/ha の平均樹高は、4.15m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

### イヌエンジュ 樹高



#### 《プチ情報》

イヌエンジュは、エンジュに似て非なるものの意味でこの名があるが、古来エンジュとよばれていたものは本種であって、中国から渡来した槐(えんじゅ)いわゆるエンジュと混同されるようになり、これを避けるために本種に「イヌ」をつけて区別するようになったものらしい。いまでも地方によっては両種を混同している所がある。

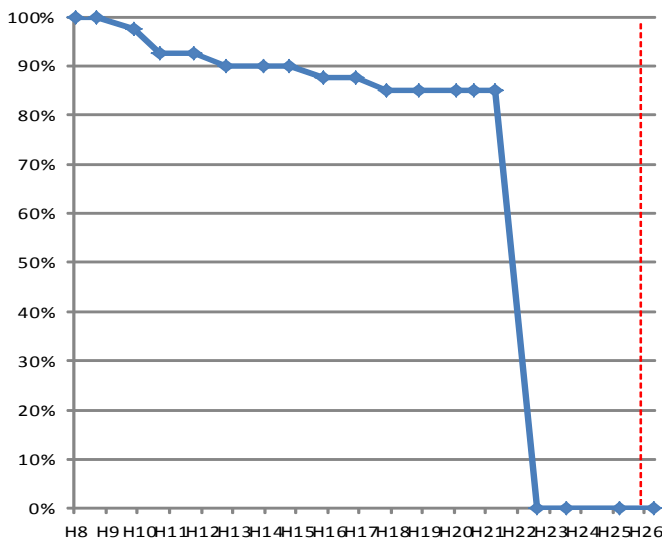
イヌエンジュを床柱材目的として植栽するには、次のような注意が必要といわれる。

- ①若い主幹がややジグザグに伸長し枝張りが広いから、疎に植えると通直な幹を得にくい。
- ②列植えが望ましくイヌエンジュと他樹種を列状に混交させる。
- ③苗間 1 m、列間 2 m くらいとし、順次除伐していく。
- ④無節材を得るため枝が細いうちに早めに枝打ちをしていく。

エンジュは中国原産で日本に伝来し、街路樹や庭木として栽培された。

樹種名	イヌマキ	
科目	マキ科	
学名	<i>Podocarpus macrophyllus</i>	
分布	イヌマキは、常緑針葉高木であり、関東から四国、九州、沖縄、国外では台湾の比較的暖かい地域に分布する。 海岸に近い山地に多く自生する。庭木として植えられ、生け垣に利用されることも多い。	
樹木特性	陰樹であり、ふつうは低地の照葉樹林中に生息するが、まれに海岸近くに占有した林をつくる。	
用途	材は水湿に強いので、建築材の他、屋根板・樋・棺・風呂桶・下駄材などに利用される。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	600本/0.13ha (4,500本/ha)	
特徴	<p>【樹形】 常緑針葉樹の高木で高さ 20m ほど。樹皮は白っぽい褐色で、細かく薄く縦長にはがれる。茎はまっすぐに伸び、枝先は上を向くが、大木になると枝先は下垂する。葉は細長い、扁平で主脈がはっきりしており、いわゆる針葉樹の葉には見えない形をしている。</p> <p>雌雄異株。雄花は前の年の枝に多数つき、穂状で垂れ下がり、黄色い。雌花は 1cm ほどの柄の先に小さな包葉があり、その中の 1 つが伸びて、その先端部に胚珠を含む。胚珠を含む部分が膨らんで種子となり、その基部も丸く膨らむ。基部の膨らみは花床と言われ、熟すると次第に赤くなり、少々松脂臭いものの甘く、食べられる。</p> <p>種子は緑色になって白い粉を吹く。こちらは毒成分を含有し、食べられない。</p> <p>全体としては緑と赤色の団子を串刺しにしたような姿となる。鳥などがこの花床を食べるときに種子散布が起こると考えられる。種子はまだ樹上にあるときから発芽を開始することがあり、これを胎生種子と呼ぶ。</p>	
試験地での様子	普通苗を植栽し順調に成長していたが、キオビエダシヤクが大量発生し、全木を伐採した。	
被害	平成 21 年 9 月にキオビエダシヤクが大量発生し、木酢液、石灰等の散布を行ったが、被害を押さえることができず全木を伐採した。野兎・鹿の食害については特になかった	

### イヌマキ 現存率



#### 【現存率】

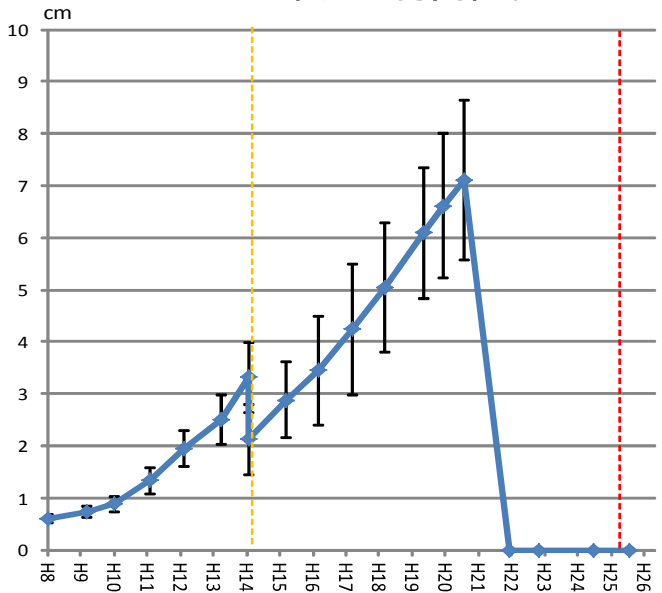
平成 21 年 9 月にキオビエダシヤク（下記写真）の大量発生により全木を伐採した。  
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 0%であった。  
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



#### 【根元・胸高直径】

平成 21 年度までは現存する樹木は順調に成長していた。  
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。  
※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

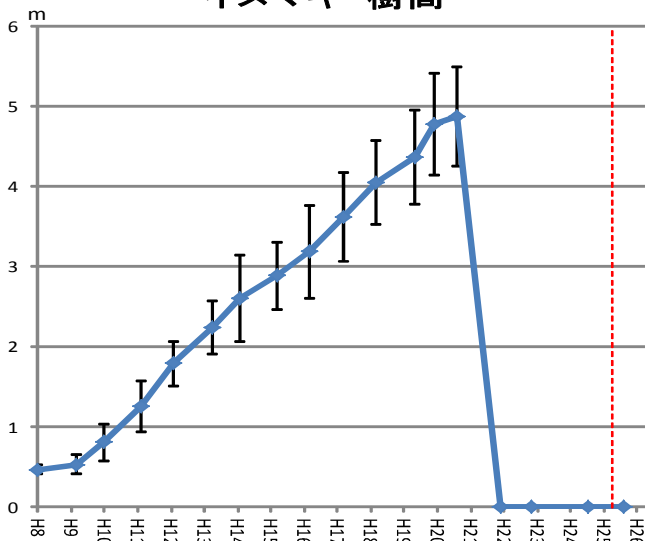
### イヌマキ 根元・胸高直径



#### 【樹 高】

植栽後、平成 21 年度までは現存する樹木は順調に成長していた。  
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

### イヌマキ 樹高



#### 《プチ情報》

単にマキともいう。本来は、別にあるマキなる木に対して、それよりも劣るものとして、この種のことをいやしんでつけられた名である。古くはスギ（杉）のことをマキとよんでいたことから、これに対するものとの説、あるいは、紀伊半島や四国地方ではコウヤマキを本楨と呼ぶことから、これに対しての命名とする説もある。ただし、材の使用に関しては、それほど劣るものではない。特に水に強いことから、風呂桶などにも用いられる。

沖縄県では、古くから木造住宅の高級建築材として利用されることがあり、国の重要文化財である中村家住宅や首里城等に用いられている。これはイヌマキが強い抗蟻性を持ち、住宅の天敵であるシロアリに強いからである。